



# 「インタラクティブ・デザインとメディア・アートの世界」 特別講演を開催

稚内北星学園大学情報メディア学部  
准教授 小谷彰宏

## はじめに

稚内北星学園大学ではCOC事業の一環として、去る10月10日、「インタラクティブ・デザインとメディア・アートの世界」の特別講演を開催しました。

## これまでの経緯

8月にはマジックエアリストをお迎えし「マジックで磨くプレゼン力」にてコミュニケーションのための“仕掛け”を学びましたが、今回は、本学の学生が学んでいる5コースの専門分野に共通する情報メディアの“仕掛け”として「インタラクティブ・デザインとメディア・アートの世界」を取り上げました。

## 講演会の内容と成果

講師にオーストリアのリンツで開催の芸術・先端技術・文化の祭典で、メディアアートに関する世界的なイベント「アルス・エレクトロニカフェスティバル」で受賞歴があり、この分野で国際的に活躍をしている真下武久氏を招聘し、鉛筆の線、水蒸気、石が入力装置となるインタラクティブ・メディアアート作品の解説やこれまでの実績を報告していただき、テクノロジーとアートが調和して魅力のある表現となることをお話しいたしました。

真下氏開発のiPadアプリの解説では、学生に身近なスマートフォンやタブレットPCの触れる操作がインタラクティブ・メディアアート研究の実用化だということに関心を示し、実際に体験することで触れて操作する感覚とコンテンツがインタラクティブに反応する様子にインタフェースデザインの重要性を認識しました。

また、9月に行われた最新のアルス・エレクトロニカフェスティバル「ポスト・シティ」の視察報告にてメディア芸術の持つ創造性が地域振興や観光産業振興等にもどのように役立つかについて現地の情報を交えてお話しいたし、学生が地域社会と協働し未来の都市像を創造していく必要性を学びました。



鉛筆で描かれた絵が入力装置になる実験の紹介



真下氏開発のiPadアプリを体験をする学生

## 今後の展望

近年、メディア芸術の分野では芸術祭や地域イベントを通して芸術の持つ創造性を社会に還元する目的で、このインタラクティブデザインを取り入れたメディアアートを地域振興や観光産業振興等に活かしております。この分野で活躍をしている真下氏のインタラクティブ・メディアアート作品の解説や研究活動の報告を受けて、本学の学生が取り組んできた地域イベントでのメディアアートの参考として今後の取り組みに活かしていき、地域振興や観光産業振興等の一助にして行こうと考えています。